



記 憶 平和と鎮魂



池田 武臣 (当時19歳、広島で被爆)
江別市

はじめに

大正15 (1926) 年生まれで90歳近い年齢となりました。人生の終着駅について思っています。戦後69年、原爆体験者として、あの原爆により不本意に非業の死をとげた不幸な人に代わり、当時の言語に絶する状況を書き後世に伝え残したく、拙文でわかりづらいたと思います、少しでも心に受け止めて頂けますと、大変うれしく存じます。

十五、十六の復員兵らは広島焼野原を見てへたへた座る
この子達で生き延びて欲し母親の最後の言葉を伝えてやりたい
一本の禪に住所氏名を頼まれし十九の吾の手はふるへたり
平成二十六年三月

現役徴集

昭和20 (1945) 年当時、私は6月で満19歳を迎え、勤め先は北海道札幌中央電報局通信課でした。我が国を大日本帝国(陸軍、海軍)と呼び、軍国主義一色でした。「八紘一宇」(全世界を一つの家にすること。または太平洋戦争における日本軍の海外侵略を正当化する標語)のもと、狂信的で戦争が大好きな遺伝子を受け継いだ権力者により、大勢の若者が戦争に駆り出され、青春も無く尊い命を失いました。

太平洋戦争で無念にも、軍人と民間人合わせて300万人の命が失われ犠牲になりました。私の徴兵検査は20歳になる来年と思っていましたが、昭和20年1月本籍地にて3月15日、徴兵検査を受けるよう通知が来まし

た。その結果、甲種合格と宣告されました。

国のためとは言いながら我が命はこれまでかと思いました。徴兵令とは明治政府が富国強兵の一環として施行、男子は20歳にして強制的に兵役に就かせたのです（現役召集と言う）。敗戦色が濃くなり本土決戦に備えて兵力が必要だったのでしょう。私の様な20歳前の若者も含み、99歳の人が合格だったと記憶しています。また、その年は、昭和20年と翌年の21年分を前倒しで徴兵したのです。現役徴兵には半年以上の間があると思っていたところ、検査後1カ月余りの昭和20年4月25日、広島市通信部隊に入隊せよと電報で通知がきました。発信元は道庁兵役係。現在でも資料が残っているはずですが、徴兵拒否、逃亡などしたら死刑に値する責めを負わされます。通常ですと役所より召集令状（赤紙）が届くのですが徴兵の速さが必要だったので、徴兵検査も現役召集など、すべて電報一本で事を運んだのです。

当時、沖縄では鉄の暴風と形容される壮絶な地上戦が米軍の本土上陸によって始まっていました。日本軍、米軍、民間人合わせて犠牲者は20万人と言われていています。私と同じように徴兵された若者25人ほどが、日の丸の旗を肩にタスキ掛けに背負い札幌駅に集合し、広島に向かって出発しました。三日三晩かかり到着しました。

広島の暁部隊へ

部隊所在地は広島市皆見町比治山公園ふもと、名称は広島陸軍船舶無線通信部隊。略称は暁16710部隊。車のナンバーも中々覚えられない私ですが、60年以上たった今でも身に染みついているのか、16710部隊の数字は忘れることはありません。兵舎は木造2階建てでした。翌日、軍服、軍靴を支給され、見た目だけは立派な二等兵が出来上がりました。部隊は全部で7つの中隊で編成されていました。1中隊に500人が収容され、本部もあったので全員で3500人余りでした。私は5中隊1班に配属となりました。部隊長は高橋中佐、中隊長は長嶋大尉、人事係は佐藤准尉、班長は山田軍曹、副班長は吉田兵長、初年兵教育係は大山・田中一等兵、その他古年兵3名、班員は48名。二段寝台で4カ所、一段6名に8を乗じて48名。一人、2畳の居住空間が与えられていました。網の無い鶏小

屋という状態でした。

教育洗脳し、必要に応じて弾除け（盾）に使うつもりだったのでしょう。古年兵にはストレスが溜まっていたのでしょう、理由なき私的制裁が度々あり、往復ビンタを受けて耳の鼓膜が破れた初年兵がいました。逃亡防止、絶対服従の精神を植え付ける手段でもあり、私的制裁はある程度、黙認されていたのです。理不尽な理由で私も火の出るような往復ビンタを受けた事があります。

初年兵教育は一番先に「我が国の軍隊は代々天皇の統率し給う所にある、上官の命令は天皇の命令と心得よ」と教えられ、天皇の「天」という言葉が出てきたら直ちに直立不動の姿勢を取るように徹底して教育されました。士官学校出身の20歳前後の青年将校が日本刀を腰にぶらさげて全身バネ仕掛のように行動していたのが今でも眼に映し出されます。うっかりして不履行した場合、往復ビンタが飛んできました。

主食はコウリャン飯（主産地は中国で脱穀もしていませんでした）、副食は根菜類が多く魚肉などはかけらもありませんでした。油揚げなどはご馳走で、汁物は太平洋汁と呼ばれ、塩汁にサツマイモの葉が2、3切れ浮いていました。太平洋汁と呼んだのは、初年兵が誰言うともなく名づけました。体重も減り栄養不良状態で「腹が減っちゃ戦も出来ぬ」と心の中で思いました。また集団生活は不衛生だったので、蚤（ノミ）や虱（シラミ）が大量に発生して、栄養失調の身の大切な血をよく吸われました。

空襲と建物疎開

この頃、東京ではB29による空爆で都市が壊滅状態となり10万人がその犠牲となりました。B29とは重爆撃機で2500から3000kgの爆弾を7から8個積んで飛来する能力をもっていました。当時日本軍よりサイパン、硫黄島を奪還、そこに航空基地を建設し本土への空襲を本格的に開始したのです。また他の主要都市でも同じく甚大な被害を受けました。東京では空爆の折に焼夷弾による家屋の類焼が激しかったので、広島市街での空襲を予想して昭和20年6月に入り、広島の家屋密集地帯で（特に駅前）、東京の空襲で学習したのでしょう、強制的に疎開させ類焼を

防ぐための防火地帯を設けるため家屋倒壊作業を命じられました。炎天下で民家の大黒柱を鋸で切断し、網をかけて全員（30人程）で引き倒しました。2カ月後広島市の市街が原爆によって消え去るとは誰も知りませんでした。

この頃からB29の飛来により空襲警報が毎晩発令されるようになりましたが、広島市街上空を通過して呉軍港を集中して爆撃したようです。編隊で飛んでくるB29の姿が雲間に影のように見えました。当時は迎撃態勢も衰えていたのでかなり低空で飛んでくるようになり、遠くから聞こえてくる爆撃の音が腹の底に響き不気味でした。なぜ広島市街を爆撃しないのか不思議に思いましたが、その時すでに原爆実験都市に決定していたのです。

空襲警報が入ると、私は対空射撃班だったので、その都度九九式短小銃を携えて比治山公園の所定の位置で任務に就きました。1万m上空を飛んでくるB29に1m不足の短小銃で迎え討つと言うのですから形だけのものでした。また対空射撃の高射砲もありましたが、B29が飛行する高度まで全く届かなかったようです。そのうちに打ち上げる弾もなくなったのか、悲しいかな音もしなくなりました。



8月6日一

昭和20年8月6日前夜、B29の飛来が激しく（延べ200機以上）、空襲警報が再々繰り返され空襲警報発令の都度、所定の位置で任務に就いたので一睡もできませんでした。そのため、午前6時半の朝食終了後、全中隊に就寝許可が下り、警戒警報が入っていましたが、あまりの眠さに寝台に入るなり熟睡してしまいました。8月6日午前8時15分、ドドドーッという今まで聞いたことの無い轟音と共に5、6機飛ばされて目がさめました。私は「営庭に爆弾が落ちたか」と思いましたが、実際には原子爆弾が投下されたのです。中隊は爆心地より1.8キロにあり、原子雲にスッポリ入っている状態だったのです。起き上がってみると1機先が見えない状態で、中隊裏に防空壕があったのに気づき、身の危険を感じ手探りで避難しました。誰もが原子爆弾が投下されたと解りませんでしたので、再度爆弾が落ちるかもしれぬと予想して絶対防空壕から出るなどの指示がありました。

私はその結果、黒い雨に当たることなく、犠牲になられた人には申し訳ないのですが生きのびる事が出来たのです。もうひとつ、仮眠していた内務班の寝台が壁よりの位置だったので直接に爆風と放射線を受けずにすんだのです。逃げる際、足裏には3カ所ガラスの破片が刺さっていました。中隊兵舎は全壊で飛んできた柱、ガラスの破片で負傷し命を落とした人が大勢いました。

兵隊仲間には爆心地より4キロ離れた場所に30名で作業をしていた所、上昇気流に乗り大量に放射能を含んだ雨が降り、予備知識が無かったので全員ずぶ濡れになり、40度の熱を出し、その後髪の毛が全部抜けて、2週間ほどで二次災害と言えるいわゆる「黒い雨」によって全員亡くなりました。

初年兵で中隊より優秀な人材が25名ほど選抜され、韓国の釜山に転属命令を受け、部隊長に申告練習のため山田班長指揮の元、中隊前の営庭に整列したところに原爆が落ち被ばくし全員亡くなりました。私の親しい戦友がこの中にもいました。優秀な若者の有望な前途が一瞬にして奪われてしまいました。残酷無念な事です。

広島は軍人の街で他種の部隊もありました。午前8時15分の時間は全部隊、朝の点呼の時間で全員営庭に集合している時間帯でした。もし、就寝許可などの特別な事情が無かったら点呼のため営庭に全員集合していたので、殆どの人が犠牲になっていたと思います。私もそのうちの一人になっていたと思います。また、その時間帯を狙って原爆を投下し全滅を図ったのかと思います。

この時期、日本軍は無抵抗状態だったので遊び感覚で飛んできて爆撃したのではないかと思います。午前11時30分、約3時間半ほど経て防空壕より出ても良いとの許可があり、広島市内を見渡すと一望千里街が消えていました。地面を見ると濡れていて不気味に光っていました。

市内の巡回

その後、市内の巡回命令が出ました。広島市に陸軍被服支廠があり軍服を作る大きな工場がありました。岡山県某女学校の生徒約100人、被服作業をすべく徴用され、列車にて広島駅に8時頃に到着、駅前広場に全員集合したところ原爆が投下され被爆し、一瞬にして消えるように全員命を失いました。15、6歳の少女です。この世を去ったことも知らずにいることでしょう。だれが責任を取ってくれるのか教えてください。そして少女たちに伝えてあげたいのです。沖縄で大勢犠牲になった女子挺身隊の姫百合（ひめゆり）の少女が思い出されます。少年たちだけではなく大勢の少女たちも犠牲になったことを忘れないでください。この世にあってはならない悲しい出来事です。

8時15分、父親は会社、母は家に残り、子供は学校。一家離散の時間帯でした。そのため電車は満員で折り重なるように死んでいました。戦争とは言語に絶する悲劇を生みだします。

熱かったのでしょうか、川の中に飛び込んで苦しんでいる大勢の人、既に息絶えている人も大勢いました。県外から来た身内の人でしょうか、瓦礫を剥がして泣きながら遺体を一人一人確認して探している人が方方で見受けられました。目的は市内警戒でしたが、この世の生き地獄をこの目で確認しただけでした。逃げ場もなく、道路には半死半生の人が足の踏み場もないほど倒れていました。

原爆投下直後、徐々に方方で火の手が上がり三日三晩にわたり燃え続けました。新聞社のドラム缶のインクが熱せられ爆発炎上、天高く燃え上がっている様子が今でも目に浮かびます。

原爆投下後B29の飛来は全く止んだので戦争は終わったのかと思いました。しかし、3日後に長崎で同じように悲惨な事が再現されるとは誰も思いませんでした。次は札幌、仙台を予定していたそうです。それは中都市が一番被害効果があるからのようです。この悲しみを二度も繰り返したのは落とした者が悪いのか、落とさせるようなことをした方が悪いのか教えてください、そして謝罪してください。広島で犠牲になった人は14万人、長崎は7万人なのです。

地獄絵図の街

兵舎全壊のため比治山公園にテントにて仮兵舎を建て、そこを拠点として救護活動をしました。前方を見ると我々を頼って4、50人の人がやってきます。全員が焼けただれたシャツを着ていると思ったのですが、背中が皮膚が水膨れになり膨らんでいました。殆どの人が両手を上げて歩いていました。脇に触れると痛いので手を上げているのです。そのような状態の人の集団が幾度も繰り返され集まってきました（不思議と集団で歩いていた）。

1キロほど離れた所に、比治山に遮られたため直接爆風を受けず倒壊をまぬがれた小学校がありました。その都度、自力で歩ける人は誘導して小学校に收容しました。すぐ屋内運動場は満員になり、仕方なく日照りも強く気温が30度近くもありましたが、筵（ムシロ）などを敷いて屋外運動場に收容しました。すべての人が半死半生の状態で千人近くの人を收容しました。それは全く地獄絵図のような状態でした。

40歳くらいの女の人から「朝食後、娘が女学校に行き連絡が取れないので心配です。兵隊さん出来れば探してください」と泣きながら哀願されました。本人は全身焼けただれて負傷しているのに娘の安否を気遣って心配し、二重の苦しみを背負っていたのです。残念ながら探す事はできませんでした。收容はしたものの薬も無く、なんの治療も出来ず、次々と命を落としてゆきました。

被爆のショックと疲労で限界だったでしょう、出産をしている人を3組も見ました。1組は誰かが乗せてあげたのでしょうか、大八車（車輪が木製）に乗せられて毛布が被せられていました。1組は草原に寝かされ、もう1組は草藁にうずくまっていた。まだ親子の命は繋がっていたと思います。このような状態が各所で起きていたと思います。今でも親子の弱った声が耳から離れません。

ふと足元を見ると20代の女性の人が上半身裸で火傷をしていました。それでも2、3歳の男の子を膝の上に乗せて授乳をしていました。さぞ胸で抱きしめたかったと思います。母親は顔が腫れて眼が塞がっており、視界は全く無かったと思います。場所的に直接爆風を受けなかったのか、子供は割合と元気で負傷した様子が見受けられませんでした。被爆時、母性愛からでしょう、子供を庇ったと思われます。子供の悲しそうな視線と目が合いました。父親の助けを待っていたのでしょうか。母親が「最後のおっぱい」を飲ませているのだと感じました。

テレビなどで「お健やかに子育てになりました」等の映像が出ますと平和で和やかな気持ちになりますが、すぐ不幸な親子の様子が眼に映し出されチャンネルを変えてしまいます。このような親子がいたことを忘れないで欲しいです。この世にこのような残酷な事が許されるのかと思いました。

40歳代くらいの働き盛りの男の人でした、坂下の方より向かってきました。様子は全身負傷して、衣類は身に着けていなく禪一本ふんどしでした。

「兵隊さん、禪に私の住所と名まえを書いてください」と頼まれました。目的は理解できました、死を覚悟の頼みだったのでしょう。また、死後からでも家族に会いたかったのでしょうか。その後、この人が人通りの多い所を選んで亡くなり、身内に拾われ無縁仏にならずに済んだと信じております。

死体収容

戦友の亡骸は角材を井形に組んだ中に入れ、油を注ぎ火葬して遺骨を収拾しました。ラップ手による単調で悲しい葬送曲に送られ立ち上がる火柱に戦友の魂を感じました。何故か自分の魂と一緒に天に昇って行く

ような切なさを感じ、今でもその旋律が忘れられません。

次は被爆の犠牲者の死体収容作業を命じられました。住所氏名がわかれば明記、わからなければ推定年齢と性別を書くようにと指示されました。天を仰ぎ、断末魔の顔をして命を落とした人が大勢いました。腐敗していたので倍以上に膨らんでいたのが今でも眼に浮かびます。これ以上の事は命の尊厳上言葉に表す事が出来ません。殆どの人の氏名がわからず無縁仏になりました。市内の焼け跡では、身内の人を捜しあて火葬して遺骨收拾している人たちを各所で見受けました。まだ身内を捜しあてず泣きながら犠牲になった人に覆ってあるものを取り、一人一人確認している人も各所で見受け哀しさを感じました。

敗戦

昭和20年8月15日(敗戦日)、天皇陛下の話がラジオで放送されるので、所定の位置に集合せよとの命令がありました。天皇の声がラジオより流れてきました。堪え難きを堪え、忍び難きを忍んでの声を聞いて敗戦を知りました。日本の国は地図の上から消えると思いましたが、「これで俺は死なずに済むのか」とも思い、正直ほっとしました。しかし一方で、我々の仲間では良からぬ噂が立ちました。戦争に負けたので女性は連れて行かれ、男性は玉を抜かれ(去勢)全員奴隷として連れて行かれるのだ。仲間も私もそれを信じました。あの時死んだ方が良かったなどと口々に言い出した仲間もいました。鬼畜米英と洗脳され、教えられていたので無条件降伏とは何をされても仕方の無い事だし、情けないが助かる道は、山に逃げるより無いと思いました。

敗戦を知った後に、命より大切にせよと教育された九九式短小銃の銃身に刻まれた皇室と、天皇の象徴である菊の紋章をヤスリで削り取れと指示を受け、一生懸命削りました。その銃を全部集めて深い海に捨てたと聞きました。

広島駅前にて、主に列車乗降者に湯茶の接待作業をするよう指示されました(伝染病予防も兼ねていた)。駅前にテントで接待所を設け、大きな旅館の焼け跡にカマドと鉄鍋が残っていたのでそれを利用して湯を沸かし茶を入れて列車到着の都度、乗降客を接待し大変喜ばれました。

今まで、負傷して苦しんでいた人達から「兵隊さん水をください」と哀願されました。熱くて苦しいほど必要だった命の水であったと思います。その水さえも残念ながら叶えてやれませんでした。

列車到着の都度、幼い顔をした16、7くらいの復員の少年達が消えてしまった市街を見て「俺の家だけは残っていると思っていた」と泣きながら途方に暮れていました。さぞかし父母また家族に会いたかったことでしょう。

復員

復員後、息子の帰りを待つ母親の悲しい話を聞き、それを思い出し重ねて胸が切なくなります。出征するときは大勢の人と日の丸に送られ出発した事でしょうに。ですが、洗脳されたとはいえ愛国心に燃え自ら志願した純粋で情熱的で行動力のある少年達だったので、敗戦で荒廃した日本の復興と繁栄に尽くしたことと私はそのように信じております。

突然、佐藤元准尉人事係に呼ばれ「お前の家庭は男手が無いので昭和20年9月10日を以て復員して良い」（父は死亡、兄は北支に出征）と伝えられました。部隊では一番早い復員で、世間の優しさを強く感じました。また佐藤元准尉殿の顔が柔和に溢れていました。少々の白米とカンパンと給付金を支給され、三日三晩かかり有蓋貨物車にて栄養失調の身体のまま、故郷である北海道の夕張に無事帰る事が出来ました。

被爆し犠牲になられた方にはいつも申し訳ない気持ちで日々、今まで生きてきました。現在でも原爆被害で一生不自由にしておられる方が大勢います。忘れないでください。私は被爆に関して今までは多くを語りませんでした。しかし、心の中では必ず私なりに見てきた被爆被害状況を書き残そうと心に決めていました。記録はしていなかったため、最近では物忘れすることが多くなったので、今だと思い記憶を呼び起こし、この目で確認し知っている限りの事を書かせて頂きました。

言語に絶する悲劇を言い伝えること、また地獄絵図のような悲しい出来事を忘れないで言い伝える事が生き残った私の責任であり、平和につながる事と思います。人としての優しさと叡知を絞って未来永劫、世界

第2章 語り伝える

平和を願い続ける事が、この度の戦争で犠牲になられた人達への最大の鎮魂になると信じております。忘れないでください、思慮に欠けた乱暴な権力者が出ると国は滅びます。

以上

私も原爆後遺症か60歳代で循環器障害、70歳代で急性心筋梗塞、80歳代で二度の心臓血管バイパス手術を受けました。難易度の高い手術でしたが、医学の進歩と高度な医療技術を持った医師に出会い、九死に一生を得て、今日迄生きてこれ大変恵まれた人生だったと思っています。これも平和があつての事と思います。皆様のご多幸をお祈り申し上げます。
(私家版『記憶 平和と鎮魂』2014年5月16日)

